

## 『般若灯論』 第12章<sup>(1)</sup> 試訳

Bhāvaviveka's Prajñāpradīpa Chapter XII

望 月 海 慧

<0>第12章の目的 (P.176a6, D.142b2, AP.299a8, AD.258a1, T.88b19)

今度は、空性に対立する主張の特徴を否定することにより、苦は無自性たることを示す目的により第12章は著わされている<sup>(2)</sup>。

<1>苦が存在することの否定

<1.1.>ある仏教学派による苦の存在論証<sup>(3)</sup> (P.176a7, D.142b3, AP.300a2, AD.259a1, T.88b21)

ここに言う。勝義として、蘊はまさしく存在するものである。何故ならば、苦であるから。およそこの世に存在しないものは苦ではない。第二の頭の如し。諸蘊は苦である。經典に「略して、五取蘊は苦である<sup>(4)</sup>」と説かれているからであり、Abhidharma にも「苦であり、集であり、世間であり、見処であり、有である<sup>(5)</sup>」とでている。したがって、理由概念をそのように説くことにより、勝義として、蘊はまさしく存在する<sup>(6)</sup>。

<1.2>Bhāvaviveka の批判 (P.176b2, D.142b4, AP.300b4, AD.259b2, T.88b25)

ここに答える。多くの苦を考察することを仮説してから、

ある者は、苦は自らにより作られる、他により作られる、両者により作られる、無因より生じる、と主張する。それが作られるとは、正しくない。<sup>(7)</sup> — 1

ある論者は、苦は自らにより作られる、とか、他により作られる、とか、両者により作られる、とか、無因より生じる、と主張する。その多くの相を考察することは、作られる結果としては正しくない。

### <1.3>苦が作られることの否定論証

#### <1.3.1>自らにより作られることの否定

<1.3.1.1> Bhāvaivēka による論証 (P.176b4, D.142b6, AP.300b8; AD.259b5, T.88c3)

どのようにか、といえば、そのうち、まず、勝義として、苦が自らにより作られることは正しくない、というように、これが示される。

もし自らにより作られるのならば、それ故、縁って生じることはない。<sup>(8)</sup>  
だろう — 2ab

何故ならば、自らにより作られるものは、因と縁とにより作られるものではないので、それに依って生じるものの性質 (dharma) は存在しない、という意味である。そのことは認められない。依って生じることは認められる。以下

のことに、苦の性質は、依って生じることである、と示される。

何故ならば、これらの蘊によってから、それらの蘊が生じるから——<sup>(8)</sup>  
2cd

何故ならば、これら現在の蘊に依ってから生じると認められるこれらの蘊が生じるから。「何故ならば」という語は、「以下の如く」という意味とみるべきである。そのような場合、それは同法喩である。ここに推論式は、勝義として、「デーヴァダッタ」という者の五蘊は、作者であるデーヴァダッタをともなっていない。何故ならば、依ってから生じるから。例えば、同一の存在に属する後の五蘊は、前の五蘊の因より生じる如し、と。

### <1.3.1.2>Vaiśeṣika 批判

<1.3.1.2.1>Vaiśeṣika の主張 (P.177a1, D.143a2, AP.301b3, AD.260a7, T.88c11)

また、Vaiśeṣika の者が、「身体と根と感官の集まったものも、我 (ātman)<sup>(9)</sup>は壊れず、それはまた、我々の主張においては、その作者を伴うものとしての唯一の依所である。それ故、それにより作られる苦は「自らにより作られるものである」とされる<sup>(10)</sup>。誰であれ諸行は 刹那刹那に滅する 性質をもつとする者<sup>(11)</sup>（＝仏教徒<sup>(12)</sup>）に対しては、心の刹那において苦が生じるものは、その作者を伴っていないので、自らにより作られるのではなく、他により作られる業果を受用しないので、他により作られるものでもない。したがって、示された結論<sup>(13)</sup> (kṛtānta) と矛盾するものである。」というので、

<1.3.1.2.2>Bhāvaviveka の反論

<1.3.1.2.2.1>Vaiśeṣika の主張に対する批判 (P.177a4, D.143a5, AP.302a7, AD.261a2, T.88c17)

彼らに対しても、それが作られるとは正しくない。その苦が作られるとは正しくない。何故ならば、我がそれを伴うものとしての依所であることには、推論による過失があるから。そのうちここに推論式は「ブルシャは、作者ではな<sup>(14)</sup>い。何故ならば、常住であるから。例えば虚空の如し」と。常住なものとしての推論による非作者性により、作者性が排除されるので、主張命題における主語の性質が排除される過失<sup>(15)</sup>がある。

さらにまた、

もし自らにより作られるのならば、それ故、縁って生じることはないだろう—— [2ab]

<sup>(16)</sup> 自らの縁により生じないであろう。何故ならば、作者が生じなければ、作用は認められないから、という意味である。

また、もし「苦は、作者たる我を伴っている」と主張するならば、その如き場合も、

それ故、縁って生じることはないだろう—— [2b]

何故ならば、我々の主張においては、苦たるものは、「我」という語として述べられるから、という意味である。

また、もしブルシャが、自らによりその業を作るのならば、

それ故、縁って生じることはないだろう—— [2b]

他なる共作因 (sahakārihetu) に（依るから）、という語の残りである。

苦は作者たる我を伴うものとしては認められない。何故ならば、多くの原因により成立させられるものであるから。例えば、強い風の力により枯木の枝が動き、摩擦により生じる林の火により、山林が焼失するという行為の如し、という意味である。ここに推論は、勝義として、デーヴァダッタの苦は、作者たるデーヴァダッタの我を伴ってはいない。何故ならば、苦であるから。例えば、ヤジュニャダッタの苦の如し、と。もし「ヤジュニャダッタの苦が生じるような場合、デーヴァダッタが作者となるので、不確定なものである<sup>(17)</sup>」というのならば、自らにより作られた業果を受け入れるので、不確定なものではない。それが変異したものであるとしても、作者の自性ではない土塊なども、世俗<sup>(18)</sup>としては、その共作因たるものの一部分となるので、過失はない。

<1.3.1.2.2.2>仏教批判に対する反論 (P.177b6, D.143b4, AP.304a5, A D.262b3, T.88c27)

「誰であれ諸行は刹那刹那に滅する性質をもつとする者に対しては、心の刹那において苦が生じるものは、その作者を伴っていないので、自らにより作られるものではない<sup>(19)</sup>」などと説く者に対しても、聴きなさい。言語慣習としては、世間におけるそれと同類のものによる区別されない相続において、それらの言語慣習は、経験上みられる。<sup>(20)</sup>例えば、「自らにより照らされる灯たるものは、これである。自らにより生長したそのアマラの木たるものは、これである」と述べられる如く、この場合も、衆生の前の刹那が、衆生の後の刹那と異なる因果関係により作られることを「自らにより作られる」という。（前後の刹那は）別なるものであっても、因果関係であるから、衆生の前の刹那によ

る善・不善が集まった異熟が領受されないことはない。例えば、毒の力が乳の刹那に注がれて、その変異は、酪の刹那において領受される如くなので、まだ作用していないものと結合したり、作用が減してしまうということはない。<sup>(21)</sup>

もし「前の刹那における業が集まった果は、後の刹那には領受されない。何故ならば、別なものであるから。例えば、異なる相続の如し」というのならば、それも正しくない。教義に、

あるものがあるものに縁って生じるものは、まず、それはその同じものではなく、それと異なるものでもない。それ故、断ぜられないし、常住なものではない——<sup>(22)</sup>〔XⅧ.10〕

とでているので、他の者の理由概念の意味は成立しないものである。心の前の刹那などの能力の区別は、生じることの対立概念である不生の相続において果となると把握される。何故ならば、能力の区別であるから。例えば、マトゥルンガの花の花弁が赤い如くなので、世俗諦においては、過失はない。

<1.3.1.2.3>Vaiśeṣika による反論 (P.178a7, D.144a4, AP.306a2, AD.264a5, T.89a16)

もし「他の方向による業が作った果は、他の方向により受用されるので、方向に、まだ作者しないものと結合したり、作用が減してしまう、という過失になろう。何故ならば、同じものにより、何度も、果は受用されないから。方向は、論理的結合関係 (saṃbandha) があると考えのならば、主張命題を損うであろう。何故ならば、接触 (sannikarṣa) や和合 (samāvaya) にも論理的結合関係は存在するから。<sup>(25)</sup> 記憶や知覚などが生じること、事物 (vastu) <sup>(26)</sup> ではないので、教義と矛盾する。我は一たるもの (ekatva) <sup>(27)</sup> であるから過失は

ない」というのならば、

<1.3.1.2.4>Bhāvaiviveka による再批判 (P.178b2, D.144a6, AP.307b3, AD.265b3, T.89a17)

それは、どのように、一たるものか。「一たる数を伴っているから」というのならば、我は、一たる数の事物を伴ってはいない。何故ならば、存在するものであるから。例えば、一たる数の如し。一と非一とに対して一たるものを考察するとしても、結合関係は、意味のないものであり、成立しないものであるから、不合理なものである。（以上は）prasaṅga の文章による方法である。

それ故、以上の如く、苦が自らにより作られるものではない、と認められる。

<1.3.2>他により作られることの否定 (P.178b5, D.144b1, AP.308b6, AD.266b3, T.89a22)

他により作られるものでもない。どのようにか、というと、

もし、それよりこれが異り、もしこれよりそれが異なるのならば、それら他のものにより、これが作られることになるので、苦は他により作られることになろう<sup>(29)</sup>——3

もし、それら前の蘊より統合される (pratisaṃdhiyamāna) これら後の蘊が異なるものであり、もし、これらからもそれら前の蘊が異なるものであるのならば、そのように考察される場合、それら他のものによりこれが作られるので、苦は他により作られるともなろうが、その如くは成立しない。他なるものに

は、推論により、その作者性がないので、その作者性が除かれることにより、何故ならば、「苦は他により作られる」と主張する主張命題における述部の性質が除かれてしまう過失があるから、という意味である。また、

それら他のものによりこれが作られることになるので、苦は他により作られることになろう—— [3cd]

とは、適合することにより、それらにおける、その他性も、まったく成立しないから。他性であったとしても、「無生の草」<sup>(30)</sup>において「他より生じることはない」と示したように、それより生じることはない、という意味である。どのように「他性は成立しない」という意味になるのか、といえば、勝義として、デーヴァダッタの前の蘊と後の蘊とは異ならない。何々ならば（同じ）デーヴァダッタの蘊であるから。例えば、後の蘊の自らの本体の如し。また、理由概念は、何故ならば、同じ相続の苦であるから。推論式の残りの支は、前の通りである。<sup>(31)</sup>

<1.3.3>両者により作られることの否定<sup>(32)</sup>

<1.3.3.1>苦が自他のブドガラにより作られることの否定

<1.3.3.1.1>前主張 (P.179a4, D.144b6, AP.310a3, AD.267b5, T.89a29)

他の者が説く。他により作られる業果は領受されず、ブドガラは、他の位と区別することにより作られるので、苦は自らにより作られるものでもあるし、他により作られるものでもあるので、両方の主張に示された過失は存在しない。



<1.3.3.1.2> Bhāvaviveka による論証

<1.3.3.1.2.1> 自らのブドガラにより作られることの否定 (P.179a5, D.144b7, AP.310b7, AD.268a2, T.89b3)

ここに答える。

もし自らのブドガラにより苦が作られるのならば、自らにより苦が作られるそのブドガラは、苦がないものであり、それは何であろう——<sup>(38)</sup>

4

自らの宗義を障礙がおおっているからである。もし、何らかのブドガラにより五蘊の特徴である苦が作られる、と考えるのならば、何であれ自らにより苦が作られるブドガラは、苦が存在しないものであって、何であろう。何であれ自らの存在によりその苦を作った「ブドガラ」というものは、苦が存在しないことはいかなる場合もあり得ない、という意味である。

また、もし、自らの見解は増えることを認めているので、ブドガラは諸蘊と同じものであるとか異なるものである、と述べられないものである、というのならば、そのような場合も、ブドガラは「デーヴァダッタ」というこれら五蘊には存在しない、と知るべきである。何故ならば、依ってから生じるから。例えば、瓶の如し。

もし、存在することを否定するために、これは存在する、というのならば、それは理ではない。何故ならば、外道により仮設された勝因 (pradhāna) やプルシャや自在主 (īśvara) などにより不確定なものであるからであり、勝義として喩例は存在しないからであり、存在することはいかなるものも認められないからである。

ここでも、前に軌範師 (Nāgārjuna) が、

もし自らにより作られるのならば、それ故、縁って生じることはない  
だろう—— [2ab]

と苦の性質は、依ってから生じるものであると示しているまさにそのことにより推論が示される。それ故、以上の如く、勝義として、ブドガラは成立しないので、苦はいかなるブドガラ自身によっても作られない、と論証される。

<1.3.3.1.2.2>他のブドガラにより作られることの否定 (P.179b5, D.145a5, AP.312a1, AD.269a7, T.89b12)

今度は、ブドガラは変異するので、苦が作られることは成立しない、というように説く。

もし他のブドガラにより苦が作られるのならば、何らかの他なるものによりその苦が作られ、与えられる、そのことは、苦がないのに、どのようにありえよう<sup>(34)</sup>—— 5

もし他のブドガラにより苦が作られるのならば、他の位は、別なる他のものによりその苦を作ってから、誰であれ与えられるものは、苦がないのに、どのようにありえよう。それはまさしく存在しないものである。何故ならば、ブドガラは苦が存在しない、と否定したからであり、それが存在すると示す推論も存在しないからである、という意味である。現在のブドガラが存在しないために、他の別なる位の異なるものが存在しないのならば、何故それにより作られるものが「他のものにより作られる」と言われよう。

『般若灯論』第12章試訳（望月）

さらにまた、前に推論により「苦は自らにより作られない」とすでにそのことを示しているので、それ故、

自らにより作られることが成立しないので、苦は他によりどこに作られよう——<sup>(35)</sup>6ab

何故ならば、まだ作られていないものに他の言説は成立しないから、という意味である。また、各々の相属が確定する場合、業が異熟を伴うことは、他により作られることが成立しないので、他の苦によりどこに作られよう、と説く。

<1.3.3.1.2.3>小結 (P.180a3, D.145b2, AP.313a2, AD.270a6, T.89b22)

それ故、以上の如く、苦は自らと他により作られることは認められない。  
さらにまた、

他により作られる苦は、その人にとっては、自らにより作られることになるから——<sup>(35)</sup>6cd

他の位が異っているとしても、ブドガラが異なることはないからである。そのような場合、「自らにより作られ、また、他により作られる」というそれは言うまでもない。<sup>(37)</sup>

<1.3.3.2>部派に対する批判

<1.3.3.2.1>部派の主張 (P.180a5, D.145b3, AP.313b1, AD.270b5, T.

89b24)

他の者が説く。<sup>(38)</sup> 自らのブドガラにより作られるので、苦は自らにより作られるものであり、何であれ苦たるものはブドガラではないので、苦は他により作られるものでもある。そのような異門から、自らと他とにより作られることが成立するので過失はない。

<1.3.3.2.2> Bhāvaviveka の反論

<1.3.3.2.2.1> 自らにより作られることの否定 (P.180a6, D.145b4, AP.31 3b7, AD.271a3, T.89b26)

ここに答える。

まず、苦は自らにより作られない——<sup>(39)</sup>7a

自らのブドガラにより作られない、という語義である。苦の自性ではないブドガラは存在しないから、という意味である。

苦の自性であるのならば、

同じものによりそれは作られない——<sup>(39)</sup>7b

(何故ならば)

もし自らにより作られるのならば、それ故、縁って生じることはないだろう—— [2ab]

『般若灯論』第12章試訳（望月）

と、それをすでに否定しているから、という意味である。

また、

同じものによりそれは作られない——〔7b〕

ということは、自らに対して作ることをなすことは経験上みられないからであり、自らより生じることが認められないようにそれにより作られることは認められないからである、という意味である。

<1.3.3.2.2.2>他により作られることの否定（P.180b1, D.145b6, AP.314a7, AD.271b2, T.89c6）

「何であれ苦たるものはブドガラではないので、それによる苦は他により作られるものでもある」と説くそれも正しくない。

もし他のものが、自らにより作られるものでなければ、苦が他により作られることがどこにある<sup>(89)</sup>——7cd

対論者が「他と考えられるものは何であれ、もし、自らにより作られず、自体として生じなくても存在するのならば、それ故、それは他なるものとして成立するから、それにより作られるし、他によっても作られるであろう」というのならば、諸賢者は、生じないものを、存在するものとして示していないので、それ故、苦が他により作られることがどこに成立しよう。それは存在しないものである、という語義である。

<1.3.3.2.2.3>小結（P.180b4, D.146a1, AP.314b5, AD.271b6, T.89c

13)

そのような場合、苦が、自らにより作られることと、他により作られることとは、正しくない。

<1.3.3.3>Sāṃkhya 批判

<1.3.3.3.1>Sāṃkhya の主張 (P.180b5, D.146a2, AP.314b8, AD.272a2, T.——<sup>(40)</sup>)

Sāṃkhya の者が「動質 (rajas) の増大により作られ、<sup>(41)</sup>働くそれらを把握することが苦である。それも、何故ならば、自身の内作具 (antaḥkaraṇa)<sup>(42)</sup>が作者たるものであるから、それ故、作者は自身であり、また、何故ならば、ブルシャの自性とは異なる内作具が変異したものが作者たるものであるから、それ故、<sup>(43)</sup>他なる作者を伴っているので、それにより作られる苦は、自らと他とにより作られるものである」といい、彼らは、以下の如く、

<sup>(44)</sup>蘊は刹那と説く仏教徒たちは、我が存在しないのならば、天上に解説する目的で努力することは無意味となろう。

前の蘊に属するその善果が生じてから、後の蘊が差別を伴って生じると認められるといえども、

彼らが他の目的で努力することは成立しないであろう。他を救けることは、いかなるものも働きをなさない。

などとも述べている。<sup>(45)</sup>

<1.3.3.3.2>Bhāvavieka の反論

<1.3.3.3.2.1>自らにより作られることの否定（P.181a2, D.146a5, AP.316a6, AD.273a4, T.——）

ここに答える。

まず、苦は自らにより作られない—— [7a]

と説く。もし「内作具により作られる」というのならば、内作具たる動質の増大が苦であるので、同じ苦により同じものを作ることは認められない。例えば、同一の瓶により同一の瓶が作られることは認められないように、と軌範師が意図して、

同じものによりそれは作られない—— [7b]

と説かれている。それ故、苦は自らにより作られない。

<1.3.3.3.2.2>他により作られることの否定（P.181a4, D.146a6, AP.316b4, AD.273b2, T.——）

今度は、

もし他のものが、自らにより作られるものでなければ、苦が他により

作られることがどこにある——〔7cd〕

対論者が内作具と異と考えるもので、何であれ他であるものは、自らにより作られない。自体が成立しない、という語である。何故ならば、「自らにより作られない」という語は、多くの対象に働くから。例えば、食べものを作る、という如し。それ故、以上のように、「他」という自体が成立しないのに、苦は他によりどこに作られよう。

さらに、他なるものが成立しないので、「ブルシャは内作具とは異なる。何故ならば、事物であるから。例えば、内作具の自体の如し」という自らの推論に過失がある。他なるものと推論することにより、（内作具は）苦を把握する作者でないものとなることによりそれが除かれるので、主張命題における述部の自性が転倒する過失もある。

<1.3.3.3.2.1>小結（P.181a8, D.146b2, AP.317b3, AD.276a6, T.——）

そのような場合、苦が、自らにより作られることと、他により作られることとは、正しくない。

<1.3.3.4>自と他とにより作られることの否定

<1.3.3.4.1>外道の主張<sup>(46)</sup>（P.181b1, D.146b2, AP.317b5, AD.274b1, T.89c14）

二種を説く者が「しからば異門より、苦は両者により作られるので、過失は存在しない」というのならば、



<1.3.3.4.2>Bhāvaviveka の反論 (P.181b2, D.146b3, AP.317b7, AD.274b3, T.89c14)

それ故、それを否定するために説く。

もし、それぞれにより作られるのならば、苦は両者により作られよう<sup>(47)</sup>

—8ab

いつであれ、その如く示す論証により、自らにより作られることと、他により作られることとは理ではない、その場合、「両者により作られる」という機会<sup>(48)</sup>は存在しない、という意味である。

<1.3.4>無因によることの否定 (P.181b3, D.146b4, AP.318a3, AD.274b6, T.89c18)

無因より生じるものでもない。「無生の章」が無因を説くことを除いている<sup>(49)</sup>ので、それ故、説く。

他のものにより作られず、自らにより作られず、無因の苦が、どこに存在しよう<sup>(50)</sup>—8cd

「他のものにより作られる」とは、他によりそれが作られることであり、「他作」という語義である。「他のものにより作られず」とは、他によりなされないことである。<sup>(51)</sup>「自らにより作られる」というのも、自らによりそれが作られることであり、「自作」という語義である。「自らにより作られない」とは、自らによりなされないことである。<sup>(52)</sup>「他のものにより作られず、自らによ

り作られない」とは、他作でなく、自作でないことである。<sup>(53)</sup> そのように説く認識根拠による過失があるので、勝義として、苦は把握されないそのような場合、苦は無因よりどこに成立しよう。それは存在しないものである、という語義である。

<1.4>苦が存在することの否定に対する論結（P.181b7, D.146b7, AP.318b6, AD.275a6, T.89c23）

それ故、以上のように、あらゆる相としても苦は成立しないので、対論者が章の最初に「勝義として、蘊はまさしく存在するものである。何故ならば、苦であるから」と説くことの理由概念の意味は成立しないものである。

<2>四種のあり方の不成立の他への適用

<2.1>概要（P.181b8, D.147a1, AP.318b7, AD.275b1, T.89c25）

ただ四種の苦が存在しないのではなく、外界の諸事物にも、四種は存在しない<sup>(54)</sup>——9

そのように示す理由により、色などの外界の諸事物にも、それら四種は存在しないものである。

<2.2>色への適用（P.181b8, D.147a1, AP.319a3, AD.275b3, T.89c28）

そのうち、まず、色についてはじめてから解釈する。

色は自らにより作られない。何故ならば、存在するものと存在しないものと

に対する作は認められないから。理趣を前に示したように。また、何故ならば、依<sup>(55)</sup>ってから生じるから。例えば、芽の如し。

生じることは、転じることによっても作られない。何故ならば、それらは他なるものとして認められないから<sup>(56)</sup>。それは、どのように認められないのか、といえは、それら大種は色より転じたものではない。何故ならば、外のものであるから。例えば、色の自体の如し。また、実体として存在するものは否定されるので、存在しないものに、他なるものは成立しないから。

両者によっても作られない。何故ならば、それぞれの作が成立しないから。無因より生じるものでもない。何故ならば、無因を説くことを否定したから。

同じように、声などに対しても述べられる。

### <3>論結 (P.182a5, D.147a4, AP.319b6, AD.276a5, T.90a7)

以上で、ここに章の目的は、対論者が章の最初に示した理由概念の意味は成立しないことを述べることにより、苦は無自性であることを示したものである。

### <4>教証 (P.182a6, D.147a6, AP.320a2, AD.276b1, T.90a9)

それ故「善勇猛よ、色は楽でもなく、苦でもない。同じように、受・想・行・識も楽でも苦でもない。色・受・想・行・識が楽でも苦でもないことが、知恵の完成である<sup>(57)</sup>」などと、

また同じように「梵天よ、その法門によっても、汝は次のように知るべきである。苦・集・滅・道は聖諦ではないが、次の如く、苦・集・滅・道の不生は<sup>(58)</sup>聖道である」などと、

また、声聞乗における世尊の教説に「『ゴータマよ、苦は自らにより作られるのか』、『具寿よ、そうではない』、『他によるのか』、『具寿よ、そうではない』、『両者によるか』、『具寿よ、そうではない』、『自らによっても作られず、他によっても作られないのか』、『具寿よ、そうではない』<sup>(59)</sup>」などと広く説くこれらが証明されるのである。

師 Bhāvaviveka により著わされた、『根本中』の注『般若灯論』より「苦を考察する」という第12章。

〔註〕

- (1) 本稿は、拙稿「『般若灯論』第11章試訳」（『榎神』第61号，1989，以下「拙稿(1)」），ならびに「『同』第13章試訳」（『立正大学大学院年報』第7号，1990）に続くものである。テキストに関しては、「拙稿(1)」の註(1)を参照のこと。
- (2) 本章のタイトルは、「*duḥkha; sdug bśal*；苦」を考察するというものであるが、*Candrakīrti* の註釈と『根本中頌』とのチベット訳のみ “*bdag giś byas pa dañ gzan gyis byas pa*” とする。
- (3) PPT によると，“*rañ gi sde pa dag*” とする。
- (4) この引用は、処々に見られ、確定はできないが、代表的なものを掲げておく。  
*Samyutta-Nikāya*, vol. V, ed., by M. L. Feer, P. T. S., reprint, 1976, p.421, 11.23—24（『南伝大蔵經』第16巻相應部六 p.340）, *Dīgha-Nikāya*, vol. II, ed. by T. W. Rhys Davids and J. E. Carpenter, P. T. S., reprint, 1966, p.307, 11.20—21（『南伝大蔵經』第7巻長部經典二 p.354）などが相應する。概当文章を示しておく、*saṃkhittena pañcupādānakkhandhā* となっている。
- (5) *Abhidharmakośakārikā*, I, 8cd, “*duḥkhaṃ samudayo loko dṛṣṭiṣṭhānaṃ bhavaś ca te*”, cf. skt. *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu, ed. by P. Pradhan, Patna, 1967, p.5, l.15, *Abhidharmakośa-bhāṣya* of Vasubandhu, Chapter I; *Dhātunirdeśa*, ed. by Y. Ejima, Bibliotheca Indologica et Buddhologica 1, Tokyo: The Sankibo Press, 1989, p.7, l.9, tip.; 北京版, 115巻 gu 31b4—5, 漢; 大正29巻玄奘訳, p.2a, 23, tr. fr.; L. de la Vallée Poussin, *L'Abhidharmakośa de Vasubandhu*, Melanges chinois et bouddhiques, Bruxelles, réédition, 1980, tome I. pp.13—14, eng. from fr.; S. Jha, *The Abhidharmakośa of Vasubandhu*, Patna, 1983, pp.22—25, jap.; 桜部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館, 1968, p.148, l.10.

- (6) 以上の敵者の主張は、「拙稿<sup>(1)</sup>」〈1.1.1〉と同じように、「宗・因・喻・合・結」となっている。他の章も同様の表現がなされている点に関して、関西大学の丹治昭義先生より御教示頂いた。
- (7) 「拙稿<sup>(1)</sup>」同様、『中頌』に関して、Prasannapadā よりのサンスクリット文を掲げておく。
- svayaṃ kṛtaṃ parakṛtaṃ dvābhyāṃ kṛtamahetukam /  
 duḥkhamityeka icchanti tacca kāryaṃ na yujyate // [227.8—9]
- また、本偈は、第1章第1偈、
- na svato nāpi parato na dvābhyāṃ nāpyahetutaḥ /  
 utpannā jātu vidyante bhāvāḥ kvacona ke cana // [12.13—14]
- と結びつけられる。
- (8) svayaṃ kṛtaṃ yadi bhavetpratītya na tato bhavet /  
 skandhānimānaṃ skandhāḥ sambhavanti pratītya hi // [228.1—2]
- (9) tib. : lus dañ dbaṅ dañ blo' i tshogs dag zig kyañ.
- (10) PPT によると、「善・不善の業の作者」である。
- (11) 全く同一の主張は、未だ確定できていないが、参考として、Vaiśeṣikasūtra, V.2.16, を示しておく。Vaiśeṣikasūtra of Kaṇāda, ed. by Muni Śrī Jambuvijayaji, G.O.S. No. 136, Baroda, reprint, 1982, p.42, l.15, 金倉圓照『インドの自然哲学』平楽寺書店, 1971, p.74, l.5.
- (12) PPT : khyed saṅs rgyas pa (AP.302a1, AD.260b4).
- (13) この Vaiśeṣika による仏教徒の利那滅批判に関しては、出典をたどることができなかった。Bhāvaviveka の Madhyamakahrdayakārikā や, Dignāga の Pramāṇasamuccaya などにおいても、Vaiśeṣika との論争がみられることから、きちんとした学派として存在していたのであろうが、B. K. Matilal 氏が言うように、この頃は、'The Dark Period' (Nyāya-vaiśeṣika, A History of Indian Literature, vol. VI.2, Wiesbaden, 1977, pp.59—62) であるので、特定の text を指摘することはできなかった。時代を、だいぶ下ると、Candramati の Prasastapāda の註釈である Śrīdhara の Nyāyakandali の中に、同様の批判がみられる。(cf. 金倉圓照「勝論と仏教の論争——特に存在の問題について——」前掲書所収)。
- (14) cf. Madhyamakahrdayakārikāvṛttitarkajvāla (D. ed. No.3856, 以下 TJ), VII, 242b 1—2, 並びに、宮坂宥勝「『論理の炎』におけるヴァイシェシカ哲学」(『インド古典論』下, 筑摩書房, 1984, 所収) 註(3)。
- (15) cf. Madhyamakahrdayakārikā (D. ed. No. 3855, 以下 MHK) VII, 6cd, 並びに, TJ. D. ed., 245a3.
- (16) text は, 'bdag' なので, 「我 (ātman)」と理解すべきか。
- (17) PPT によると, 「デーヴァダッタがヤジュニャダッタをたたく場合, ヤジュニ

「ダッタに苦を生じさせる作者はデーヴァダッタである」となる。

(18) tib : boñ ba.

(19) <1.3.1.2.1> における Vaiśeṣika の仏教批判であるので、この後、「他により作られるものでもない。」という言説が略されている。

(20) D, AP, AD は、このように 'tha sñad de dag' とあるのだが、P は 'tha mi dad de dag' とある。P のように読むことも十分可能であり、こちらの方が良いかとも思えるが、ここでは前者を取った。

(20) PPT : kun rdzob tu sems can gyi skad cig ma sña ma dañ phi ma gzan ñid yin du zin kyañ.

(21) 前の刹那が、未だ作用を受けていない後の刹那と結合してしまったり、前の刹那が、後の刹那と結合する前に、作用が減してしまう、ということである。

(22) Prasannapadā においても、同様のところで、本偈を引用する。

pratītya yadyadbhavati na hi tāvattadeva tat /  
na cānyadapi tattasmānnocchinnam nāpi śāśvatam [375.11—12]

(23) R. Pandeya 氏は、この 'phyogs' を 'pakṣa' と還元している (The Madhyamakaśāstram of Nāgārjuna, Delhi, 1988)。しかし、Vaiśeṣikasūtra を考慮に入れ、'dis' と取る。また、PPT によると、'sems kyi skad cig ma sña ma'i phyogs gzan' とある。

(24) PPT によると「同類の同じ因果の相続における前後の刹那の方向」(AP.206b2, AD. 264b4) とある。

(25) cf. MHK VII, 11, TJ 246b4—246b7, 宮坂氏前掲書 pp.87—88.

(26) PPT : byed pa po dañ za ba po la sogs pa de dag thams cad yin par 'byuñ la.

(27) cf. MHK VII, 23—24, TJ 248b7—249a3, 宮坂氏前掲書 p.94.

(28) MHK VII, 21, TJ 248b3—248b7, 宮坂氏前掲書 pp.92—93.

(29) yadyamibhya ime 'nye syurebhyo vāmi pare yadi /  
bhavetparakṛtaṃ duḥkhaṃ parairebhiraṃ kṛtāḥ // [229.2—3]

(30) 第1章のことであろう。前註(7)参。

(31) 主張命題と喩例は、直前のものである。

(32) 以下、三番目の否定がはじまるが、これは、「自ら、或いは (or)、他により作られること」と「自らと (and) 他とにより作られること」の二通りの解釈がある。

(33) svapudgala kṛtaṃ duḥkhaṃ yadi duḥkhaṃ punarvinā /  
svapudgalaḥ sa katamo yena duḥkhaṃ svayaṃ kṛtaṃ // [230.9—10]

(34) parapudgalajaṃ duḥkhaṃ yadi yasmai pradiyate /  
pareṇa kṛtvā tadduḥkhaṃ sa duḥkhena viṭā kutaḥ // [231.7—8]

なお、Prasannapadā、『大乘中観釈論』、青目注『中論』並びに、チベット訳『根本中頌』は、この偈と次の偈の間に、もう一偈、

parapudgalajaṃ duḥkhaṃ yadi kaḥ parapudgalaḥ /  
vinā duḥkhena yaḥ kṛtvā parasmai prahīṇoti tat // [231.13—14]

というものが存在する。意味は、第五偈の裏返しである。

(35) svayaṃ kṛtasyāprasiddherduḥkhaṃ parakṛtaṃ kutaḥ /  
paro hi duḥkhaṃ yatkuryāttattasya syātsvayaṃ kṛtam // [232.3—4]

(36) PPT : lha daṅ mi la sogs pa rgyud.

(37) PPTによると、〈1.3.3.1.1〉の「両者により作られる」という前主張に対する論結である。

(38) PPT : rnam par phyed ste smra pa'i sde (Vibhajyavādin) daṅ chos sruṅ  
sde (Dharmagupta) daṅ gos dmar sde (Tāmraśāṭīya) daṅ gnas ma'i bu'i  
sde (Vātsīputriya) daṅ sa ston gyi sde (Mahīśāsakāḥ) daṅ chos mchog  
sde (Dharmottariya) daṅ sar sgrogs rigs kyi sde (Kāurukullakāḥ).

cf. Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna (北京版 No. 5640, デルゲ版 No. 4139,  
=TJ ad MHK N.8, P. ed. 161a3—169a5), A. Bareau, Trois Traités sur  
les Sectes Bouddhiques, Ie Partie, Journal Asiatique, 1956, pp. 167—191,  
寺本雅雄・平坂友嗣共訳註「異部宗精釈」（『藏漢和三訳対校異部宗輪論』黙働者  
1935, 所収）。

また、Vātsīputriya のブドガラ説に対する批判に関して、Abhidharmakośa X  
においてすでに指摘されているが、ブドガラと苦とを関係づけてまで論じられては  
いない。また、同章には、Vaiśeṣika に対する批判がみられるのだが、PP にみら  
れる Sāṃkhya の批判はみられない。

(39) na tāvatsvakṛtaṃ duḥkhaṃ na hi tenaivo tatkrtaṃ /  
paro nātmakṛtaścetsyādduḥkhaṃ parakṛtaṃ katham // [232.10—11]

(40) Sāṃkhya 批判に関しては、漢訳は、全くなされていない。

(41) Sāṃkhyakārikā 13b, 'upaśāmbhakaṃ calaṃ ca rajaḥ' 金倉圓照『真理の  
月光』講談社, 1984, pp. 113—114, 湯田豊「サーンキヤ・カーリカー(1)」『人文  
学研究所報（神奈川大学）』No. 17, 1983 p. 49.

(42) tib. : naṅ gi byed pa dag. それ故, ādhyātmika とも取れる。

(43) cf. 『真理の月光』pp. 26—27.

(44) tib. : śā kya pa dag.

(45) 現時点で、出典は未確認。MHK VI ならびに TJ には、みられない。特に  
Sāṃkhya の text に限定せず、仏典よりの引用とも推測できる。

(46) PPT : mu stegs 'os pa ba nam mkha'i gos can dag.

(47) syādubhyāṃ kṛtaṃ duḥkhaṃ syādekaikakṛtaṃ yadi // [233.4]

(48) PPT : rgyu med ces bya ba ni rgyu ṅan pa ste / ṅo bo ṅid daṅ dbaṅ  
phyug daṅ skyed bu daṅ gtso bo daṅ dus daṅ sred med kyi bu la sogs pa  
dag las skyed ba med par bkag pa.

- cf. 丹治昭義『中論釈 明らかなことばⅠ』関西大学出版部 1988, 註 (344) .
- (49) 前註 (30) 参。
- (50) *parākārāsvayaṃkāraṃ duḥkhamahetukaṃ kutaḥ* // [233,9]
- (51) Pandeya 氏の還元梵文は, '*pareṇa kṛtaṃ pareṇaitat kṛtaṃ pareṇa tat kṛtamiti gṛhyate / pareṇa na kṛtamiti parākāram*/' (前掲書 p.225) とある原文の 'byas' と 'byed' と使い分けを考慮するなら, 三番目の 'kṛtam' を 'kāram' とするべきである。また, 偈頌には, 'byas=kāram' となっていることから, これを考慮して, 'kṛtam' と 'kāram' とを入れかえて解釈することも可能である。
- (52) Pandeya 氏の還元梵文は, '*svakṛtaṃ ātmanaitat kṛtamiti svenaivakṛtam-etat iti gṛhyate / svayameva na kṛtaṃ āt manā kṛtam*/' とする。これも前註と同様, 三番目と五番目の 'kṛtam' を 'kāram' ととるべきであり, さらに, 変換も可能である。
- (53) これも前の二例と同じく, 'byas' と 'byed' と使いわけているが, 前例のケースとは異なり, 偈頌のサンスクリットは 'kṛtam' となっている。
- (54) *na kevalaṃ hi duḥkhasya cāturvidhyaṃ na vidyate / bāhyānāmapi bhāvānāṃ cāturvidhyaṃ na vidyate* // [233,16,17]
- (55) もう一つの推論であり, 主張命題は前のものと同じである。
- (56) PPT : *gzugs gzan gyis ma byas te gzan med pa'i phyir ro* .
- (57) *Suvikrāntavikrāmaparipṛcchāprajñāpāramitāsūtra* (text に関しては, 拙稿(1)註 (44)に従う) skt. : p.31, ll. 21—24, tib. : tsi 44b2—4, 和訳 : p.135, ll.12—14.
- (58) \* *Āryabrahmaviśeṣacintāparipṛcchāsūtra* (text に関しては, 拙稿(1)註 (43)に従う) tib. : phu 39b8—40a1, 漢訳 : 竺法護訳 p.6, ll.23—25, 鳩摩羅什訳 p.39, ll.2—4, 菩提流支訳 p.69, ll.18—20.
- (59) *Samyutta-Nikāya* (前掲書) . vol. II, p.19, l27—p.20, l.3, p.22, ll.15—25, 『南伝大蔵経』第13巻 相应部經典二 p.27, p.31. ただし, 上記の text においては, 「具寿 (āyusmat ; tshe dan ldan pa)」にあたる語が, 'Kassapāti', 'Timbarukāti' となっている。



〔付論〕以下の論稿は、前述の論文とは全く異なるものではあるが、第42回日蓮教学大会（於、身延山短期大学）において発表したものの概要である。

### Madhyamakopadeśa における Atiśa の世俗解釈

Atiśa による二諦説の解釈に関しては、諸 text にみられ、すでに諸氏により論じられている。ここでは、彼の**MU**のはじめの部分にみられる二諦説のうち、世俗諦に関する部分のみに焦点をあてる。山口瑞鳳氏の訳を示しておく<sup>(1)</sup>と「世俗において一切法は、こなたの見る側で言う限り、因果等の在り方一切も顕現する通り真実であるけれども、勝義としては・・・」と示されている。このうち、「顕現する通り (yathābhāsa) と、「有効な働き能力 (arthakriyāsāmarthya)」(**MUV**による) とにより世俗諦を解釈していることに対し、考察する。

まず、yathābhāsa を Prajñāpāramitā は **MUV** において、「考察されることなく飲ばしだけのもの (avicāraikarāmaṇiṃ) で、顕現とは無自性の意味である」と解釈している。この term を世俗諦を説明する際に用いるのは、Atiśa の **SA22ab, 23ab** にもみられることから、彼はすでに定型句として用いていたことがうかがえる。また彼により翻訳されている Bhavya 著とされる **MRP** (D. ed. tsha 260b5) や、同じ Bhavya 著とされる **MAS 9ab** にも、<sup>(2)</sup>同様の解釈がみられることから、この表現は Atiśa 以前に、すでに一般的なものであったと言える。それではどこまで遡れるかというと、Jñānagarbha による **SDVK 3cd, 4cd, 5ab** にみられる。また、江島恵教氏は、この term に関して、「Yogācāra 学派の用語である<sup>(3)</sup>」と述べている。これは、ābhāsa<sup>(4)</sup>という語の方にポイントをおいてのことであろうが、現時点、yathābhāsa という term は、Yogācāra の諸 text に確認することはできなかった。以上のことから、yathābhāsa に関しては、Atiśa は、Jñānagarbha の text に直接

触れていたとは言わないまでも、その影響を受けていたと言える。

次に, arthakriyāsāmarthya に関してであるが, **MUV** では, 「(世俗) 諦は, arthakriyāsāmarthya として諦である」と解釈している。これは, Prajñāmokṣa 独自の拡大解釈ではなく, **SA** 3cd にみられ, Atiśa 訳の **MA S** 10ab にみられることから, 彼の解釈は妥当なものであったと言える。では, この term も遡ってみると, Śāntarakṣita の **MA** 64cd, さらに, **S DVV** ad **SDVK** 8abc にたどり着く。しかし, さらに, Dharmakīrti の **PV** III 3—4 にも見られる<sup>(5)</sup>。また, 戸崎宏正氏は, さらに Bhāvaviveka にまで言及している<sup>(6)</sup>。まず, Dharmakīrti に関してであるが, Atiśa は **BMDP** において Dharmakīrti を批判していること<sup>(7)</sup>, また, **MU** の前出の文章の直後の勝義の解釈は, 論理学派に対する批判とともとれることから, **PV** のこの箇所<sup>(8)</sup>に依拠したとは言いがたい。次に, Bhāvaviveka に関してであるが, 現時点で, 彼が世俗諦を解釈する上で, この term を用いたということに関しては確認できていない。以上のことから, arthakriyāsāmarthya に関しては, Atiśa は, やはり, Jñānagarbha の影響を受けていたと言える。

これらのことから, Tson kha pa の影響の下に, Atiśa を prāsaṅgika の系譜に入れていたことに対して, 少し修正の余地があるということが確認できた。山口瑞鳳氏の指摘するように, 「中観派とはいえない」<sup>(8)</sup>とは言わないまでも, 従来の Candrakīrti の系譜や, 今回の Jñānagarbha のものと, 特に区別せず, どちらも自らの主張の中に取り入れていたことがうかがえる。それ故, Atiśa から, prāsaṅgika という限定を一つはずすべきである<sup>(9)</sup>。

略号 (text の edition 並びに翻訳等の情報に関しては省略する) **BMDP** = Bodhimārgadipapañjikā, **MA** = Madhyamakālaṃkāra, **MAS** = Madhyamakārthasaṃgraha, **MRP** = Madhyamakaratnapradīpa, **MU** = Madhyamakopadeśa (P. No.5324, 5326, 5381), **MUV** = Madhyamakopade-

śavṛtti (P. No. 5327), **PV** = Pramāṇavārttika, **SA** = Satyadvayāvatāra, **SDVK** = Satyadvayavibhaṅgakārikā, **SDVV** = Satyadvayavibhaṅgavṛtti.

〔註〕

- (1) 山口瑞鳳「チベット仏教史略説」『東洋学術研究』第21巻・第2号, 1982, p.9.
- (2) これらの Bhavya を, Prajñāpradīpa や Madhyamakahrdayakārikā, —vṛtti-tarkajvāla の著書と別人と解釈する。cf. 山口益「中観派における中観説の綱要書」『山口益仏教学仏集』上巻, 春秋社, 1972, 江島恵教『中観思想の展開』春秋社, 1980, pp.18—34.
- (3) 江島氏前掲書 p.26, 並びに, 「アティージャの二真理諦」(壬生台瞬編『龍樹教学の研究』大蔵出版, 1983所収) p.369.
- (4) ābhāsa に関して, 勝呂信静「唯識説の体系の成立」『講座大乘仏教8 唯識思想』春秋社, 1982, pp.91—92参照。
- (5) この二偈をめぐる解釈の異同をめぐる論争に関しては, 松本史朗氏により明確に示されている。cf. 「仏教論理学派の二諦説」(上), (中), (下), 『南都仏教』第45, 46, 47号, 1980, 1981, 1982.
- (6) 戸崎氏は, 野沢静証氏(「中観両学派の対立とその真理観」宮本正尊編『仏教の根本真理』, 1957, p.475)による, kriyākārasāmarthyā=arthakriyāsāmarthyā という見解に従っている。cf. 戸崎宏正『仏教認識論の研究』上巻, 大東出版社, 1979, pp.64—65.
- (7) 江島氏前掲書, pp.246—248.
- (8) 山口瑞鳳「チベット仏教思想史」『岩波講座 東洋思想第11巻 チベット仏教』岩波書店, 1989, p.58—59.
- (9) cf. D. S. Ruegg, The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India, A History of Indian Literature, vol. VII, Wiesbaden, 1981, p.113.

〔付記〕本稿を, 本年四月に急逝なされた, 東京都立大学の篠田一士先生に捧げることにする。氏による文学上の方法論は, 仏教学を研究する上でも, 大変参考にさせていただいている。また, 他大学の者にもかかわらず, その講義の末席に参加させていただいた東京大学の江島恵教先生, 並びに, 駒沢大学の袴谷憲昭先生には, 大変感謝しております。さらに, このような機会を与えて下さった, 立正大学の勝呂信静先生には深謝いたします。